

# 血液型と相性 (1)

——血液型の組み合わせは相性の良さを規定するか？——

横 田 晋 大<sup>1</sup>

(受付 2013年3月25日)

## 和 文 要 約

本研究の目的は、血液型が相性の良し悪しを予測することができるか否かを検討することにある。日本人には、血液型が性格を予測するとの強い信念が存在する。社会心理学者をはじめ、血液型と性格との関連には科学的な根拠がないことが示されてきた。しかし、血液型と相性との関連を検討した知見は存在しない。そこで、本研究では、夫婦を対象とした質問紙調査を実施し、3つの血液型の組み合わせのタイプのそれぞれについて、夫婦間のコミュニケーション量、夫婦関係満足度、主観的幸福感の差を検討した。44組の夫婦を検討した結果、血液型の組み合わせによって相性の良さに差は見られなかった。

## 序 論

血液型と性格とが関連あるとの認識は、現代でも日本人には非常に強い信念として存在する。血液型から性格が“分かる”ことは、古川竹二が1927年に発表した論文“血液型による気質の研究”を皮切りに、能見正比古・俊賢により、日本人には馴染みの深いコミュニケーションツールとなった。ただし、血液型と性格との関連は、社会心理学者により、科学的に否定されており (e. g., 松井, 1991), むしろそのような誤った信念が偏見を生み出すことの危険性について警鐘が鳴らされている (e. g., 佐藤・宮崎・渡邊, 1991; 上瀬・松井, 1991)。だが、これまでのデータで示されたことは血液型が性格を予測しないというものであり、血液型の組み合わせによる“相性の良さ”に関しては検討されてこなかった。そこで、本研究では、血液型の組み合わせが夫婦の相性の良さを予測するとの仮説の妥当性を検証する。夫婦を対象とした質問紙調査を行い、血液型の組み合わせのタイプにより、主観的幸福感などの夫婦間の相性の良さを示す指標が異なるかを検討することで、血液型による相性の予測力を検証した。

---

1 本論文の執筆にあたり、広島修道大学 中西大輔准教授から貴重なコメントをいただきました。また、データ収集の際、広島修道大学 人文学部 人間関係学科 心理学専攻の卒業生である兼松志帆氏、新谷香純氏の両名にご協力いただきました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

### 血液型と性格に関する先行研究

血液型と性格との関連が日本中に流布したのは、能見正比古（1971）による著書“血液型でわかる相性”がベストセラーになってからである。能見正比古・俊賢親子は、近年まで一貫して血液型と性格との関連を主張してきた。この主張に対し、社会心理学者は、血液型と性格との関連を否定するデータを提出してきた（Cramer & Imai, 2002; 松井, 1991; Rogers & Glendon, 2003; Wu, Linstead, Lee, 2005）。また、Nature の総説には、血液型と性格との間に遺伝的な根拠はないと述べられている（Risch, 2000）。以上より、血液型による具体的な性格特性の予測は困難だと言える。

これまで、社会心理学者が示してきた知見は、血液型には具体的な性格特性を予測する根拠がないと示すことに主眼が置かれていた。しかし、能美らが主張しているもう一つの血液型の特徴は、血液型の組み合わせによる相性である。すなわち、血液型の組み合わせにより、対人関係における相性の良し悪しが予測できる、との主張である。

能美（2010）によると、恋愛関係から上司との関係まで、血液型により対人関係の対処方法が分かるという。能美による血液型の相性の定義は、“それぞれの組み合わせの努力や工夫の仕方を考えていくこと”（能美, 2010, p. 130）であり、血液型は“客観的な人間理解に役立つ”ための道具である。そして、血液型の相性には三つの“エリア”があるという。一つ目は、“リード・おもり関係”である。“おもり”は相手を精神的に支えることであり、“リード”とはその支えを元に、行動面で相手を引っ張っていくことを指す。リード・おもりの組み合わせは、A型とO型、O型とB型、B型とAB型、AB型とA型である。この組み合わせは“お互いの役割に徹する”ことが求められるため、本研究では“役割”と呼ぶ。二つ目は、“魅力と対立の関係”である。互いに反対の持ち味があり、反発しながらも、自分にはないものに強く惹かれる“刺激的な”関係である。組み合わせは、A型とB型、O型とAB型である。本研究ではこの組み合わせを“刺激”と呼ぶ。三つ目は、“同じ血液型同士の関係”，すなわち、発想や感覚が同じであり、互いの気持ちを分かり合える関係である。本研究では、この組み合わせを“同型”と呼ぶ。このように、血液型の組み合わせによって、それぞれの相性が予測されているにも関わらず、血液型と相性の関連について、科学的観点から検討されたことはない。本研究では、これら三つのエリアについて、夫婦を対象とした質問紙調査を通じ、それぞれの組み合わせにおける相性の良さに違いがあるか否かを検討した。本研究では、“相性の良さ”を測る指標として、夫と妻のそれぞれにおけるコミュニケーション量、夫婦関係満足度、主観的幸福感を採用した。夫婦関係満足度とは、結婚・夫婦関係に対する総合的な評価のことであり、主観的幸福感とは、感情状態を含み、家族・仕事など特定の領域に対する満足や人生全般に対する満足を含む広範な概念のことであり（Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999）。もし夫婦の相性が良ければ、夫婦間のコミュニケーションも良

好であり、夫婦関係の満足度も、主観的な幸福度も高いと予測される。

## 方 法

### 調査対象

調査は、子供の巣立ち時期（20歳前後）を迎えている中年期の夫婦47組（夫47名、妻47名）を対象に行った。夫の平均年齢は49.28歳（ $SD=5.02$ ）、妻の平均年齢は53.00歳（ $SD=11.10$ ）であった。

### 調査方法

質問紙調査は、複数回に渡って行った。まず、広島修道大学での心理学の実習の授業において、調査の意図を説明した上で、学生を通じてその両親に協力を依頼した。依頼した質問紙は2週間中に回収した。また、それ以外にも同大学や他大学の学生を対象に同様の依頼を行い、調査を行った。なお、夫婦間の回答の独立性が保つため、質問紙は2部を1組とし、それぞれ別々の封筒に入れたものを渡し、回答後にはすぐに封をするよう教示した。

### 質問項目

調査では、夫と妻のそれぞれにおけるコミュニケーション量、夫婦関係満足度、主観的幸福感を測定した。夫婦間のコミュニケーション量は、平川・柏木（2001）の夫婦間のコミュニケーション態度尺度を改変したものをを用いた。平川・柏木のオリジナルの尺度は、夫婦間のコミュニケーションにおける相手への態度の質に注目したものだったが、本研究では夫婦間で日常的にどれくらいコミュニケーションが多く行われるかを測定することができるように変更した。項目数は25項目であり、4点尺度（1：“全く当てはまらない”から4：“非常に当てはまる”）で評定を求めた。ポジティブな態度の項目は13項目であり、ネガティブな態度の項目は12項目であった。また、夫婦関係満足尺度は、柏木・平山（2003）で用いられたものを採用した。全6項目であり、4点尺度（1：“全く当てはまらない”から4：“非常に当てはまる”）で評定を求めた。本研究では、伊藤・相良・池田・川浦（2003）により作成された主観的幸福感尺度15項目を使用した。各項目について、4点尺度（1：“全く当てはまらない”から4：“非常に当てはまる”）で評定を求めた。デモグラフィックデータとして、血液型、家族構成、最終学歴、年齢、妻の就業状況・年収について記入を求めた。

### 仮説

能美（2010）による三つのエリアの特徴より、最も対立的である“刺激”の組み合わせは、

他の組み合わせよりも相性は相対的に良くないと考えられる。よって、次の仮説が成り立つ。“刺激”のペアは、他の二つのペアよりも、ポジティブなコミュニケーションは少なく、ネガティブなコミュニケーションが多いだろう（仮説1）。“刺激”のペアは、他の二つのペアよりも、夫婦関係について満足していないだろう（仮説2）。“刺激”のペアは、他の二つのペアよりも、主観的な幸福度は低いだろう（仮説3）。

## 結 果

### 尺度の内的妥当性

各尺度における内的妥当性を検討するため、信頼性係数（クロンバックの  $\alpha$ ）を算出した。その結果、妻のポジティブなコミュニケーション尺度 ( $\alpha = .75$ )、ネガティブなコミュニケーション尺度 ( $\alpha = .91$ )、関係満足度 ( $\alpha = .76$ )、主観的幸福感 ( $\alpha = .89$ )、そして夫のポジティブなコミュニケーション尺度 ( $\alpha = .67$ )、ネガティブなコミュニケーション尺度 ( $\alpha = .73$ )、関係満足度 ( $\alpha = .76$ )、主観的幸福感 ( $\alpha = .89$ ) のそれぞれにおいて十分な値が得られたため、それぞれ平均値を算出し、尺度を作成した。

### 血液型エリアの効果の検討

妻および夫におけるコミュニケーション量、関係満足度、主観的幸福感における平均値および標準偏差を Table 1 に示す。

コミュニケーション量 コミュニケーション量において、2（コミュニケーション態度：

**Table 1**  
各血液型タイプにおける妻と夫のそれぞれのコミュニケーション量、  
関係満足度、主観的幸福感の平均値および標準偏差

		役 割		刺 激		同 型	
		妻	夫	妻	夫	妻	夫
	<i>N</i>	18	18	12	12	15	15
コミュニケーション ポジティブ	<i>M</i>	3.02	2.62	2.81	2.38	2.89	2.60
	<i>SD</i>	0.66	0.28	0.66	0.45	0.38	0.31
コミュニケーション ネガティブ	<i>M</i>	1.66	1.74	1.73	1.55	1.80	1.86
	<i>SD</i>	0.63	0.45	0.37	0.46	0.64	0.51
関係満足度	<i>M</i>	3.12	3.24	2.92	2.97	2.84	2.87
	<i>SD</i>	0.54	0.41	0.73	0.60	0.36	0.50
主観的幸福感	<i>M</i>	2.82	0.50	3.04	3.06	2.86	0.40
	<i>SD</i>	0.50	0.39	0.42	0.48	0.40	0.39

**Table 2**  
態度で分類した妻と夫のコミュニケーション量の平均値と標準偏差

	ポジティブ		ネガティブ	
	妻	夫	妻	夫
<i>N</i>	47	47	47	47
<i>M</i>	2.93	2.55	1.72	1.77
<i>SD</i>	0.57	0.37	0.58	0.51

ポジティブ/ネガティブ) × 2 (性別: 妻/夫) × 3 (血液型エリア: 役割/刺激/同型) の三元配置の分散分析を行ったところ, コミュニケーション態度 ( $F(1, 42) = 119.85, p < .01$ ), 性別 ( $F(1, 42) = 9.56, p < .01$ ), そしてコミュニケーション態度と性別の交互作用効果 ( $F(1, 42) = 5.91, p < .02$ ) において有意な効果が得られた。そこで, コミュニケーション態度と性別のみで分類したコミュニケーション量の平均値と標準偏差を算出した (Table 2 参照)。下位検定として, Bonferroni 法による調整を行った水準 ( $p < .0083$ ) にて対応のある  $t$  検定を行った結果, 全ての群間において有意差が見られた (妻のポジティブとネガティブ:  $t(46) = 8.91, p < .001$ ; 妻のポジティブと夫のポジティブ:  $t(46) = 4.35, p < .001$ ; 妻のポジティブと夫のネガティブ:  $t(46) = 10.62, p < .001$ ; 妻のネガティブと夫のポジティブ:  $t(46) = 8.38, p < .001$ ; 妻のネガティブと夫のネガティブ:  $t(46) = 0.62, p < .001$ ; 夫のポジティブとネガティブ:  $t(46) = 9.49, p < .001$ )。以上より, 夫婦間のコミュニケーションでは, ネガティブな態度よりもポジティブな態度で多く行われるが, 妻は夫よりもポジティブなコミュニケーションを行う一方で, 夫はネガティブなコミュニケーションを行うとの結果が得られた。しかし, 本研究の主眼である血液型エリアによる効果は見られなかった (血液型エリア:  $F(2, 42) = 1.67, p = .20$ ; 血液型エリアと態度:  $F(2, 42) = 0.53, p = .59$ ; 血液型エリアと性別:  $F(2, 42) = 0.80, p = .46$ ; 三次の交互作用効果:  $F(2, 42) = 0.19, p = .83$ )。確認のため, 夫と妻それぞれにおいて, 血液型エリアの効果を検討するため, 一元配置の分散分析を行った。しかし, いずれの尺度においても有意な差は見られなかった (妻ポジティブ:  $F(2, 42) = 0.49, p = .62$ ; 妻ネガティブ:  $F(2, 42) = 2.23, p = .12$ ; 夫ポジティブ:  $F(2, 42) = 0.23, p = .80$ ; 夫ネガティブ:  $F(2, 42) = 1.40, p = .26$ )。これより, 血液型エリアの違いがコミュニケーション量に影響するとは言えない結果であった。よって, 仮説 1 は支持されなかった。

夫婦関係満足度 関係満足度において, 2 (性別: 妻/夫) × 3 (血液型エリア: 役割/刺激/同型) の二元配置の分散分析を行ったところ, 血液型エリアの主効果に有意傾向が見られた ( $F(2, 42) = 2.81, p = .07$ ) が, 性別の主効果 ( $F(1, 42) = 0.45, p = .51$ ) および交互作用効果 ( $F(2, 42) = 0.10, p = .91$ ) は見られなかった。妻と夫のそれぞれにおいて, 血液型エリ

アの効果を調べるために一元配置の分散分析を行ったところ、妻では有意な差は見られず ( $F(2, 42) = 1.11, p = .34$ )、夫では有意傾向で差が見られた ( $F(2, 42) = 2.51, p = .09$ )。しかし、Tukey 法による下位検定の結果、有意な差は見られなかった。すなわち、血液型エリアの違いにより、関係満足度が異なるとは言えなかった。よって、仮説 2 は支持されなかった。

**主観的幸福感** 主観的幸福感において、2 (性別:妻/夫) × 3 (血液型エリア:役割/刺激/同型) の二元配置の分散分析を行った。その結果、いずれも有意な効果は見られなかった (血液型エリア:  $F(2, 42) = 1.69, p = .20$ ; 性別:  $F(1, 42) = 0.04, p = .85$ ; 交互作用効果:  $F(2, 42) = 0.10, p = .91$ )。確認のため、妻と夫のそれぞれで一元配置の分散分析を行ったが、有意な差は見られなかった (妻:  $F(2, 42) = 0.95, p = .40$ ; 夫:  $F(2, 42) = 0.97, p = .39$ )。これより、血液型の組み合わせは、主観的幸福感に影響するとは言えないことが示された。よって、仮説 3 は支持されなかった。

### 尺度間の相関関係

探索的な分析において、興味深い結果が得られたため、夫と妻のコミュニケーション量、関係満足度、および主観的幸福感との関連を報告する。各尺度間の相関係数を Table 3 に示す。まず、妻と夫のコミュニケーション量は、態度に関わらず関連していなかった (妻ポジティブと夫ポジティブ:  $r = .21, p = .16$ ; 妻ポジティブと夫ネガティブ:  $r = .04, p = .81$ ; 妻ネガティブと夫ポジティブ:  $r = .02, p = .89$ ; 妻ネガティブと夫ネガティブ:  $r = .22, p = .14$ )。よって、妻と夫がそれぞれ考えるコミュニケーション量は、二人の間で必ずしも同程度ではないことが示された。興味深い結果として、妻のポジティブなコミュニケーションは妻自身の関係満足度と強い正の相関 ( $r = .79, p < .01$ ) を、ネガティブな態度は負の相関 ( $r = -.39$ ,

**Table 3**  
妻と夫のコミュニケーション量、夫婦関係満足度、主観的満足感における相関係数

	コミュニケーション量				夫婦関係満足度		主観的幸福感	
	ポジティブ		ネガティブ		妻	夫	妻	夫
	1. 妻	2. 夫	3. 妻	4. 夫	5. 妻	6. 夫	7. 妻	8. 夫
2	.21							
3	-.33*	.02						
4	.04	.21	.22					
5	.79**	.23	-.39**	.05				
6	.18	.34*	-.04	-.16	.30*			
7	.04	-.07	.00	.06	.08	.18		
8	.12	.40**	-.05	-.07	.16	.41**	.17	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$



$p=.01$ ) を示す一方で、主観的幸福感とは関連が見られなかったこと (ポジティブ:  $r=.04$ ,  $p=.80$ ; ネガティブ:  $r=.00$ ,  $p=1.00$ ) が挙げられる。一方で、夫のポジティブなコミュニケーション量は、妻同様、関係満足度と正相関 ( $r=.34$ ,  $p=.02$ ) するが、ネガティブな態度は関係満足度と関連しなかった ( $r=-.16$ ,  $p=.30$ )。そして、夫の場合、ポジティブな態度のコミュニケーション量と夫自身の主観的幸福感が正相関していた ( $r=.40$ ,  $p=.01$ )。しかし、ネガティブな態度のコミュニケーション量は主観的幸福感と関連しなかった ( $r=-.07$ ,  $p=.63$ )。すなわち、妻は、夫とポジティブなコミュニケーションを多くしていると思っただけで夫婦関係に満足しており、ネガティブなコミュニケーションを多くしていると思っただけで関係に満足していないことが示された。一方、夫は、妻とポジティブなコミュニケーションを多く行っていると思っただけで夫婦関係に満足し、主観的に幸福だと感じていると言える。

## 考 察

本研究の目的は、血液型の組み合わせが、相性の良さを予測できるか否かを検討することであった。そのため、夫婦を対象とした質問紙調査を実施し、能美 (2010) の分類に基づいた血液型の組み合わせ群の違いにより、夫婦間のコミュニケーション量、夫婦関係満足度、主観的幸福感が異なるか否かを検討した。その結果、いずれにおいても群間に差は見られず、血液型の組み合わせにより、夫婦の間でのコミュニケーション量、関係満足度、主観的幸福感に違いがないことが示された。よって、血液型は、夫婦間の相性の良さを予測しないことが示された。

追加的な分析結果として、夫婦間でコミュニケーション量と関係満足度、主観的幸福感との関連が異なることが示された。まず、夫婦間における主観的なコミュニケーション量は、一致していなかった。すなわち、夫の申告するコミュニケーション量と妻の申告するコミュニケーション量は同程度ではなく、夫婦間で乖離があることが示された。また、妻は、コミュニケーション量が関係満足度と関連するが、主観的幸福感とは関連せず、夫はポジティブなコミュニケーション量だけが、夫自身の関係満足度および主観的幸福感と関連していた。この結果は、夫婦間のコミュニケーションにおける満足は結婚満足度の重要な予測因であるが (Jacobson & Moore, 1981)、そのコミュニケーションスタイルは男女で異なることを示している。本研究の結果より、妻は夫とは異なり、コミュニケーションそのものが夫婦関係満足度を規定すると言える (伊藤・相良・池田, 2007)。だが、夫は、自身が行うポジティブなコミュニケーション態度のみが関係満足度や幸福感と関連しており、ネガティブな態度は夫婦間の関係性のあり方に何ら影響しない。この結果が示唆するのは、妻に対してネガティブ

な態度でコミュニケーションを行うことによって夫婦の間に亀裂が入る可能性を、夫は自覚していないということである。夫婦関係の良好さには双方向のコミュニケーションが重要だが、特に男性はコミュニケーション時の態度を見直す必要があるかもしれない。

#### 本研究の問題点

**定義の曖昧さ** 本研究では、血液型の組み合わせにより3群にペアを分け、群間で相性の良さを示す指標となる心理変数を測定し、その差を検討した。しかし、本研究の結果は、能美らの主張を根本的に覆すものとは必ずしも言えない。それは、能美による3群の相性の“良さ”に関する定義の曖昧さに依る。能美の三つのエリアの定義には、組み合わせが良い方向にも悪い方向にも転がるが含まれている。それは、あくまで彼らが、血液型を客観的な関係性を記述するためであると捉えているからである。能美の論理は、バーナム効果(Meehl, 1956)と同じ構造である。バーナム効果とは、誰にでも当てはまる一般的な性格特性の記述を、自分だけに当てはまるとみなす現象であり、占いなどで使われる手法である。すなわち、血液型による性格判断や相性判断は、定義に曖昧さを残すことで、それぞれの特徴を誰にでも当てはまるものにしてしまい、解釈の後付けを可能としているのである。そのため、本研究の結果も、“成熟した夫婦を対象としたため、すでに良い関係が構築されており、差が出ないのは当たり前である”との解釈が可能であろう。しかし、能美らが彼ら自身の主張を血液型人間“学”と謳うならば、この解釈を支持する科学的な根拠と再現性のあるデータが必要である。

**サンプルの問題** 本研究では、サンプル数が50に届かず、統計的検定を行うにはN数が不足していた。また、成熟した夫婦を対象としたため、20代、30代などの若年の夫婦についても検討されていない。以上より、追試を行う際には、より広範な年代の夫婦を対象に調査を実施する必要があるだろう。

**相性の定義** 本研究では、相性が良いペアは主観的幸福感や夫婦関係満足度が高いとの前提を置き、調査・分析を行った。しかし、“相性の良さ”が必ずしも主観的幸福感や夫婦関係満足度に反映されるとの保証はない。相性の良さには、いつも仲が良いというだけではなく、共同作業をしやすい、互いに良い距離を持って生活ができる、互いに刺激になる、など、様々な側面がある。そのため、例えば互いに刺激になるとの関係性であれば、ケンカが多くて一見仲が悪いように見えるだろうし、主観的幸福感や夫婦関係満足度質問項目の得点も低くなるだろう。しかし、互いへの信頼感や互いを目標として切磋琢磨できるかなどの項目が存在すれば、当然得点は高くなるはずである。よって、本研究の結果のみならず、相性の良さを多角的に捉えることができる尺度を作成したり、より多くの従属変数を測定し、血液型の組み合わせとの関連を検証したりするべきであろう。



日本人が血液型と性格の関連を信じるようになった久しい。社会心理学者による努力にも関わらず、未だその信念は完全に払拭しきれていない。上瀬・松井 (1991) による血液型ステレオタイプの解消を試みた実験においても、血液型と性格の関連が無いとの講義を受けても、まだその関連を固く信じる人が2割ほど残ったと報告されている。社会心理学者は、より説得的なデータを提出することで、日本人の血液型に関する信念を変革することに貢献できるだろう。

## 引用文献

- Cramer, K. M., & Imai, E. (2002). Personality, blood type, and the five-factor model. *Personality and Individual Differences*, **32**, 621-626.
- Diener, E. (2000). Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index. *American Psychologist*, **55**, 34-43.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, **125**, 276-302.
- 古川竹二 (1927). 血液型による気質及び民族性の研究 教育思潮研究, **1**, 208-234.
- 平山順子・柏木恵子 (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度—妻と夫は異なるか? 発達心理学研究, **12**, 216-227.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2007). 夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響—自己開示を中心に— 文京学院大学人間学部研究紀要, **1**, 1-13.
- 上瀬由美子・松井 豊 (1991). 血液型ステレオタイプの機能と感情的側面 日本社会心理学会第32回大会発表論文集, 296-299.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性—妻はなぜ不満か— 心理学研究, **74**, 122-130.
- Jacobson, N. S., & Moore, D. (1981). Spouses as observers of events in their relationship. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **49**, 269-277.
- 松井 豊 (1991). 血液型による性格の相違に関する統計的検討 立川短大紀要, **24**, 51-54.
- Meehl, P. E. (1956). Wanted—A good cookbook. *American Psychologist*, **11**, 262-212.
- 能見正比古 (1971). 血液型でわかる相性 伸ばす相手、こわす相手 青春出版社.
- 能美俊賢 (2010). 血液型で性格と相性がおもしろいほどわかる本 王様文庫.
- Risch, N. J. (2000). Searching for genetic determinant in the new millennium. *Nature*, **45**, 847-856.
- Rogers & Glendon (2003). Blood type and personality. *Personality and Individual Differences*, **34**, 1099-1112.
- 佐藤達哉・宮崎さおり・渡邊芳之 (1991). 血液型性格関連説に関する検討 (3) ステレオタイプから偏見へ 日本発達心理学会第2回大会発表論文集, 147.
- Wu, K., Linstead, K. D., & Lee, J. W. (2005). Blood type and the five factors personality in Asia. *Personality and Individual Differences*, **38**, 797-808.

Summary

Blood-type and compatibility (1)

— The effect of blood-type stereotype on compatibility of  
the middle-aged married couples —

Kunihiro Yokota

Several studies have investigated the validity of the blood-type stereotypes, widely thought in Japanese popular culture to be indicative of personality and temperament. However, no studies have tested the compatibility of blood-type for relationship partners. In this study, I investigate which type of pairs, based on their blood-types, show the highest level of compatibility. This study examined forty-four married couples divided into three types based on their blood-type combination, and examined differences of the quantity of communication, relationship satisfaction, and subjective well-being. The results showed that there were no statistical differences among three types of couples.